朝刊本紙 2026/11/07(土)

留学生 薬物の危険性学ぶ

中区 依存の実態や影響 警官から



薬物乱用の問題について議論する留学生

警察官が薬物の危険性を伝える留学生向けの乱用防止講話が6日、広島市中区の叡啓大であった。同大に9月に入学した16人が参加し、薬物依存の実態や心身への影響について学んだ。

広島中央署刑事2課の加藤洋志巡査部長(36)が、覚醒剤や大麻、合成麻薬の写真をスライドで示し「グミやクッキーといった見た目の物もある」と説明。薬物依存による幻覚などの症状を挙げ、「薬物の乱用は他の人も悲しませる。絶対に手を出してはいけない」と説いた。

留学生は「気分が落ち着く」などと勧められた場合の断り方などについて議論した。メキシコ出身のヤツィリ・エルナンデスさん(31)は「捜査経験がある警察官の話は説得力があった。ピカチュウのラムネのような覚醒剤があると知り驚いた」と話していた。

講話は若者の薬物乱用が社会問題になる中、県警が大学や高校で実施している。

(中野花菜)

©The Chugoku Shimbun